

フィリピンとの掛け橋

第22号（3教区合同ワークキャンプ報告第4号）

2016年5月18日

人々に支えられた、フィリピンワークキャンプ！



2月28日の送別会でフィリピン中央教区の人々と参加者たち

様々な出合いを体験

いろいろ困難なことも乗り越えた第13回目のフィリピンワークキャンプの参加者たちの感想文などを皆様にお届けします。

今年は、9年前の2007年に第4回のワークキャンプで、私も含めて九州教区の4人が滞在したことのある、ヌエバ・エシハ州パラシのセント・デービッド・オブ・ウェールズ教会を会場にして、行われ

ました。

9年ぶりに会う人たちとも、もっと親しく交流したかったのですが、今回はキャンプ中、体調を崩した者たちが出てきたので、その付き添いで、私はパラシには最後まで滞在できず、日曜日の説教も、用意していたものを代読してもらうことになりました。

しかし、参加者の感想を読むと、それぞれ自分の置かれた状況の中で、一生懸命フィリピンの

フィリピンワークキャンプに参加して 沖縄教区 司祭 岩佐直人



(手を挙げて司式しているのが岩佐司祭)

今年はパラレというマニラから車で5時間の村に行き、1週間を過ごしました。ワークキャンプに行って初めて冷蔵庫がある村に滞在し、沖縄よりも暑い日差しの中で冷たい飲み物を飲む幸せを味わせてもらいました。水道・ガス・携帯の電波はありませんが、村のみんなと一緒に礼拝をし、食事をし、遊んだり作業をする生活はとても楽しい時間でした。

作業は教会の敷地の回りにブロックで塀を作ること。沖縄教区で言えば主教座聖堂ぐらいの広さがあったでしょうか、人がスコップで穴を掘って基礎を作り、ブロックを運び、セメントをこねる。たったの30mも作業が進まなかったのですが、教会のみんなで汗を流して作り上げていくことは、作業の結果よりも大切で、また幸せだったと感じています。教区の皆さんからいただいたリーダーで子ども達は楽しく練習をし、3日できらきら星や聖歌、映画のテーマなどを少し吹けるようになりました。とても熱心に練習していたので次に行く時にはもう少し教える曲が増やせるかと思います。ご協力くださった皆さんに感謝します。

神戸・九州・沖縄、そしてフィリピンの仲間と過ごす日々はとても新鮮であり、また感謝に満ちたものです。共同体・仲間とは何か、隣人を愛するとはどういうことなのかをいつも教えられています。来年はこの仲間にぜひ皆さんに加わって

もらって喜びを分かち合えることができることを願っています。主に感謝して。

初フィリピン

垂水伝道所 長谷川 優

フィリピンでは、日本では経験できないことを沢山でき、とても良かったと思う。

一番感動したことは、「主の平和」を日本語でフィリピンの方が歌ってくれたこと。頑張ってローマ字を読んで歌ってくれていることを考えたら涙が出た。みんな歌が好きで歌手みたいに上手い人が多かった。「歌が上手いからもう一度聞きたい！」と言えばもう一度、二度と何回も聞かして頂いた。

衝撃的な事は沢山あった。交通量、バロット、犬、鳥、トイレ。鳥は日本でも普通にスーパーでも並んでいるが、目の前で殺されるのを見るとやはりありがたみが良く分かる。本当に日々食事出来ていることに感謝しなければならなかった。日本で目の前で生きたところから食になるまでの過程を見る事はないので行って今までよりも断然食に感謝するようになった。



(パラレの教会で感謝状を受ける長谷川兄)

フィリピンの方々には本当に気さくで言葉は通じなくてもボディーランゲージや表情で一緒に楽しむことができた。優しい方ばかりで分からない事があれば「Ano ito?」と聞けば分かりやすく教えて頂いた。

日本みたいに蛇口をひねれば水、お湯が出たりする環境では無かったが、特別困った事は無かった。今の日本人は贅沢しすぎていると思う。スイッチを押せば電気がつき、トイレでもひねれば水が流れ、ハイテクな事が多すぎる。そのハイテクな事が当たり前の日本人よりもフィリピンの自分たちで自足している方が断然的に幸せそうに見えた。

日本に帰ってからも食に対する感謝は日々忘れることなくしている。これは本当に大切なことなことだとフィリピンワークキャンプで特に学んだことだった。

今、与えられているもの

徳島聖テモテ教会 松崎那奈

私はこのフィリピンワークキャンプで「自分の与えられているもの」に気づく大きな経験をさせていただきました。

今回の派遣先は首都マニラよりバスに乗って、揺られること5時間。ヌエバエシハ州のパラレにある St. David of Wales Episcopal 教会でした。海外ボランティア初参加だったので最初はとて不安でしたが、神戸教区からは長田司祭と参加者4名がおり、皆に心強く励ましてもらいました。そして何より、その不安を打ち消すほどの笑顔と優しさが私たちを待っていてくれたのです。

今回のワークでは、フェンスを作りました。最初は柵のようなものを作ると思いましたが、実際はブロックを積み上げ、セメントで固めるという本格的な塀でした。体験するまでは、フェンス一つ作るのがこんなに大変な作業だとは知りませんでした。気温の高い中、重いセメントを混ぜたり運んだり、大変な重労働です。疲れもありましたが、村の人たちとも声を掛け合いながらの作業することで、一体感と絆のようなものが生まれたと思います。子供たちもフェンス作りを手伝ってくれました。皆が炎天下の下で集まり、協力し合う姿から、それぞれの個人が村や教会のことを思う強い気持ちを感じることができまし

た。

私は、村の子供たちと過ごした時間から、たくさんのことを学びました。フィリピンの子供たちの日常生活は、毎日の生活用水の水汲み、木登りで木の実を取っておやつにと活動的です。遊びは主に自然を活かした木登りや木切れを使った高飛びなどです。優に 120 cm は飛び越えてしまいそうでした。日本では水道をひねればきれいな水が出る、スーパーに行けば食材豊富、小学生は集まってもゲームに向かったまま、そんな日常生活を振り返る多くの機会を与えられました。



(パラレの子どもたちと写真に写る松崎姉・左)

私たちはリコーダーや縄跳び、その他にも折り紙やけん玉など日本伝統の遊びのものを持っていきました。特にリコーダーの演奏では、現地には楽譜がなく、拙い英語と見よう見真似の説明でしたがみんな一生懸命聞いてくれ、最後の夜には『きらきら星』をみごとに演奏して聞かせてくれました。また、日本語とタガログ語を教えあったりもしました。相手のことを知ろうという気持ちがあれば、完璧な言葉はなくても気持ちは伝わるのだと改めて実感しています。

今、私は「与えられているもの」に喜びと価値を感じています。

そして、モノや便利さだけが私たちの幸せや豊かさを作っているのではないと、実感しています。また、来年胸を張って彼らに会うことが出来るよう「与えられているもの」に感謝し、貪欲に求め続ける自分を振り返りながら神様を感じて生活したいと思います。

感想文

司祭 ヨシユア 長田吉史



「フィリピンでたくさんの人と出会う、新しい人と出会う」という期待と少しの不安が入り混じる中、今年の目的地であったヌエバエシハ州へと向かいました。初めての出会いと言うのは、どうしても少々の緊張が伴ってしまいます。でもフィリピンの皆さんの笑顔とおもてなしは、それをすっかりと包んでくださいました。

今回は特別な場所に、個人行動をすることになってしまいましたが、そこでもある意味での「フィリピンでたくさんの人と出会う、新しい人と出会う」という目的はなされましたけれども、それは自己管理できなかつたゆえの出会いであったため、深く反省しています。

このように色々な出会いが与えられましたけれども、この度も毎年ながら「豊かさ」というものを考えさせられました。しかしその答えは数年来探し求めていても、未だ明確なものを見つけられないままですが、毎年何らかの「豊かさ」の部分を感じてきているように思っています。今回も

それを経験しましたけれども、その「豊かさ」は色々な出会いの中で、一緒に歩くことで生み出されてきていることは間違いありません。

ありがとうございました。

『フィリピンへ帰る』

大分聖公会 古澤 はん奈

16歳、高校1年生の春に初めての飛行機、初めての海外でフィリピンワークキャンプに参加した際、空港についた時の熱気、ジプニーやタクシー、一般車両がひしめく渋滞道路、スーパーの前でお金をくれと言うストリートチルドレン、お湯は普通に出てこないという状況に衝撃を受けたと同時に、フィリピンの人の優しさ、素晴らしいおもてなしを受け感動した事を今でも鮮明に覚えています。そして今年のワークキャンプは、私が初めて訪れた場所である、パラレで行うという事で参加を即決しました。

9年ぶりのパラレに到着した時、沢山の子ども達が出迎えてくれ、以前お世話になった教会のメンバーと再会することが出来ました。メンバーは変わっていないようで、子どもが生まれ子育て中の人がいったり、教会のメンバーが増えていたり、ちょっとした変化も嬉しかったです。それから水色の教会の柱や中の壁をピンクに塗った教会は、いつの間にかクリーム色と緑に塗りかえられ落ち着いた雰囲気になっていたり、以前宿泊した牧師館も中が改装されていたり、お風呂として使っていた井戸も変わらずあったりと、見る所見る所とっても懐かしかったです。パラレ滞在2日目はパラレの近くにある伝道所を訪問しましたが、日本とフィリピンの寒暖の差に身体が慣れていないままにジプニーの屋根の上に登って移動したせいもあるのか、パラレ滞在3日目の朝から高熱を出してしまいました。日本から持参した薬では熱が下がらず、パラレでワークも出来ずに、小林司祭とマニラに戻りました。日曜日に教会で説教する予定だった小林司祭には大変申し訳ないことをしたなと思います。



(マニラで友人たちと会う古澤姉・中央)

マニラに戻ってからは EDCP (フィリピン中央教区) のオフィスのメンバーが体調の事を気にかけてくれたり、またタクロバオ主教の娘さんや息子さん、お孫さんに初めて会う事ができたり、ずっと仲良くしているベニー、チェイスに再会したりと、思いがけず新たな出会い、再会がありとても嬉しかったです。日本で体調を万全にしてからワークキャンプに臨めば、体調も崩さずにパラレでワークをして、他のキャンパーとマニラに戻ってくる事が出来ていたと思います。しかし体調を崩していなければ出会いや再会も無かったかもしれません。どんな方向に私が転んでも、神様が私のため、その時に必要な道をしっかりと備えて下さっているという事を実感出来たキャンプだったと思います。どんな場所においても恵みを与えて下さる神様に感謝しつつ、またフィリピンへ「帰る」事が出来るよう、今まで培ってきた繋がりを大事にしていきたいです。

(九州教区報 5月号から転載)

フィリピンワークキャンプ 2016 を終えて

姫路顕栄教会 野間陸

昨年に続いて 2 度目のフィリピンワークキャンプに参加させて頂きました。今年は、首都のマニラから車で 5 時間、そこからジープニーというバスの様な車 (水陸両用ではないはずだが川も渡る) で 1 時間程かけて、パラレという村を訪れました。ワークの内容としては、教会の敷地を囲む高さ 2m のブロック塀を築くというものでした。常夏のフィリピン、日中のワークでは真夏の様に汗をかきますが、朝夕は冷えるので、日が落ちた後に浴びる井戸水の風呂は少々気合いを入れなければなりませんでした。



(パラレの女の子を抱く野間兄)

7 日間のワークキャンプの間、常に私が感じていたのは、パラレの人々のホスピタリティの偉大さでした。「ホスピタリティ」という言葉を調べると、“接客・接遇の場面だけで発揮されるものではなく、人と人、人とモノ、人と自然などの関わりにおいて具現化されるもの”と表されます。木になっている実を気になって見ていると、ひょいひょいと登って実を取って来てくれる司祭がいたり、毎晩の振り返りの時間では十分すぎる程に何か問題はなかったかと確認してくれたり、一日三度の食事と二度のスナックを毎日準備してくれたり。パラレに着き、最初の礼拝の説教の中でダグソン司祭が語った「私は彼ら (ワークキャ

ンパー)を、日本からの“ワークキャンパー”が来た、とではなく、日本に住む“友人”が来てくれた、と思う」という言葉には深く感銘を受けました。

キャンプ中、「もし彼らが日本を訪れる事があった時に、自分は彼ら彼女らの様なホスピタリティを持って接する事ができるのだろうか」という自問を繰り返しました。ホスピタリティは人と人の間で行き交うものですが、それは一方通行と一方通行によって行われるものではなく、お互いに、喜び、感謝し、それらを共有する事によって成立するものではないかと思えます。共に喜び、共に感謝し合う、私が出会った最高のホスピタリティを持つフィリピンに住む“友人”との出会いに感謝します。そして、このキャンプを企画・運営する上で関わられた全ての方々に感謝します。

感想文

垂水伝道所 アイリス八代希

私にとっては今回で二度目となるフィリピンワークキャンプ。去年過ごしたフィリピンでの楽しかった日々が脳裏に浮かび、この一年間、月日が経つとともに私の期待や感情はワクワクで膨らみ、日々胸を踊らせる思いでした。出会った人々と再会できること、フィリピンの生活が再び味わえること、日本の文化を伝えれること、ワークとして人々のために奉仕できること、多くの喜びが存在する反面、二度目とはいえ不安も多少ありました。

実際、ワークキャンプを終えると昨年に比べて学んだことが多くあり、1回目とはまた違った観点でフィリピンという国を見つめ直すことができた気がします。同じフィリピン人でも、生活する環境が違えば性格も村によって様々で、バンリックの村の人々はもっと勢いが強かったとか、今回の村の方はチャイニーズ系の顔が多かったとか実際に訪れたことによって知れたことが非常に多くありました。また、村によっては、今日の生きる為の糧を探しながら生きていく子供たち

も存在し、スルーできない社会があるのが現実であり、以前の私も同情や偏見の目でフィリピンを見ていたのは確かです。この目に映るひとつの光景の中に高層建築物とスラム街が愕然と建ち並んであり、生で見る貧富の激しさは、画面越しでみるよりはるかに衝撃的でした。



(村の子どもたちに囲まれた八代姉)

とはいえ、私たちが生活してきた村は何の不便も感じない非常に馴染みやすい環境でした。そのうえ、裸足で走り回る子供たちがいたり、他人の子供を我が子のように愛し時には怒鳴る大人がいて、いつでもどこでも皆が家族のように集まり食事をともにする。そこにいた村の人たちの笑顔に愛想笑いや気遣いはなく彼らの本物の笑顔を感じることができ、それはまるで日本の昭和初期のようなあたたかみがそこにはありました。悲しいことに現在の日本ではあまり見かけることのない光景であり、むしろストレスが積み重なる非常にピリピリした社会だと感じます。周りに流され、互いが互いの顔色を伺いながら言動の自由を縛りあい波風が立つようなことはできるだけ避ける。どこの社会に出てもうかつにも本音を語れないような社会に嫌気がさし、私自身、心の片隅にどこか違う環境での刺激を無意識のうちに求めていたのかもしれない。

あっという間に過ぎ去ったフィリピンでの生活は、想像以上に楽しいものとなりこの一週間全

てが輝いていたように思います。特にその中でも、聖アンデレ神学校の生徒やバンリックの村の人との1年ぶりの再会は涙が溢れるほどの喜びだったことを今でも昨日のここのように覚えていません。

このメンバーでキャンプができたこと、フィリピンでしか出来ない体験やチャンスを与えて下さった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました！

(説教)

大齋節第3主日 日本の教会の宣教の目標

団長 司祭 フランシス 小林史明

*当初は2月28日の礼拝で説教するはずでしたが、病人の付き添いで先にマニラに帰ってきたので、代読してもらったのですが、それをここに紹介し、私のフィリピンや日本に対する思いを述べさせていただきます。

主よ、わが岩よ、わが贖い主よ、わが口の言葉、わが心の思いを御心に適わしめたまえ。アーメン

今日の旧約と福音書は、モーセとイエス様が、それぞれイスラエルの人々を救うために遣わされるお話です。モーセを遣わす神様は、イスラエルの人々がエジプトの地で奴隷生活の苦しみの中から救いを叫び求めている、イスラエルの人々の叫び声を聞いて、そこから人々を連れ出そうと、モーセを派遣するのです。

一方、福音書の方は、ぶどう園にいちじくの木を植えて、3年間も育てたのに、実を結ばないので切ってしまおうとするぶどう園の主人に対して、そこで働く園丁が、もう一年努力してみるの、切り倒すのを待ってくれるように頼む話です。ぶどう園の主人が神様で、園丁はイエス様。そしていちじくの木が、イスラエルの人々です。

この話で、私たちが疑問に思うことは、ぶどう園にどうして、いちじくの木を植えるのか、ということ。皆さんは考えたことがありますか？ぶどう園にはぶどうを植えるのが常識です。しか

しそれには理由があるのです。フィリピンではぶどうをどのようにして育てるのか知りませんが、日本では、ぶどうはぶどう棚というのを作って育てます。ぶどうというのは、リンゴやマンゴーやパイナップルのような、しっかりした幹に枝を張るわけではありません。紐のような蔓が伸びて育ちます。この蔓が元気に育つためには、それが伸びていくように、細い木や針金などで、ぶどう棚と言われる、蔓が巻き付くような骨組みを作る必要があるのです。

そのために、いちじくの木のように、木の幹からたくさん枝が出ているものが、ぶどうの蔓の近くにあると便利なのです。それで、このふたつの木は、聖書では一緒になって登場します。たとえば、ミカ書4章4節に、『人はそれぞれ自分のぶどうの木の下／いちじくの木の下に座り／脅かすものは何もないと／万軍の主の口が語られた。』とありますが、これは二つが並んでいるのではなく、ぶどうの蔓が巻き付いたいちじくの木の下にいることを語っています。世の終わりの平和で喜ばしい姿を語った言葉です。本来ぶどうの蔓が巻き付くために植えたいちじくの木ですが、この木からいちじくが取れたら、一石二鳥ですね。ぶどうがイスラエルの代表的な農作物であるのと同様に、いちじくもやはり有名な農作物なのです。

イスラエルの農作物は、聖書のある個所に、7つのものが並んで書かれている箇所がありますが、皆さんご存知ですか？聖書の5番目の書物。申命記の8章8節です。今日の旧約聖書は神様がモーセをエジプトに遣わして、イスラエルの人々をエジプトから導き出して、広々とした素晴らしい土地に連れて行く、と約束されたところでしたが、それを説明しているのです。

申命記8章7節から読んでみましょう。『8:7 あなたの神、主はあなたを良い土地に導き入れようとしておられる。それは、平野にも山にも川が流れ、泉が湧き、地下水が溢れる土地、8:8 小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろが実る土地、オリーブの木と蜜のある土地である。』

最後の「蜜」というのは、蜂蜜のことではなく、ナツメヤシの木になる実のことです。

さて、実らないいちじくの木とは、何のことか皆さんおわかりですか？悔い改めないイスラエルの人々を指しています。神様であるぶどう園の主人の期待に応えず、実を实らせない、これはイスラエルの人々だけでなく、人類すべてを指している、と考えた方がいいでしょう。その人類が切り倒されて、滅ぼされないように、イエス様が世界に遣わされて、働いておられる、という風に考えるべきでしょう。

この悔い改めない、実らないいちじくの木を、私たち日本人に当てはめてお話しして、現在の日本の問題点を紹介し、それをイエス様の弟子である私たちクリスチャンはどうするのか、日本の教会と言いましょか、日本人の課題を紹介し、私たちのために祈りいただきたいと思ひます。

2014年の7月27日、フィリピン政府の人口委員会は、フィリピンの人口が1億人を突破したことを発表しました。2010年の国勢調査では、9234万人だったのですが、年間2%増加しており、一昨年7月27日に、1億人を突破したというわけだ。このままでいけば、2028年には、1億2300万人になって、日本の人口を抜くことになるそうです。

一方日本の状況は、今、日本人がどんどん高齢化して、人口も2008年から減り始めました。もともと、私たち日本聖公会の高齢化と信徒数の減少は、20年以上前から始まっています。人数が一番多かった1990年の四分の三。しかも、その4割くらいが、70歳代以上の人々です。大変深刻な状態に置かれています。

高齢化と、人口減少の問題は、これは、教会だけでなく、日本の国全体の問題です。この老人の問題を取り上げて、昨年、日本でよく読まれた本の中に「下流老人」というのがあります。

皆さんは、日本人が金持ちだと思っておられるかもしれません。ところが、日本の人口が減ると同時に、日本の経済力も落ちて来ました。30年ほど前、日本人は自分たちのことをみんな金持

ちで、「一億総中流意識」という風に、国民はみんな自分たちが平均的な日本人であって、みんな豊かだと思っていました。ところが、主な労働力であった人々が退職すると、もう働く人々の人口が極端に減ってきているのです。そして、収入がないのに、物の値段ばかりが高くなり、おまけに、医療制度が進んで長生きをするようになると、生活費に困るのです。新幹線という、とても速い電車がありますが、昨年の6月、その中で自分に油のようなものをかけて、自殺した人がいました。お金がなくて生活できないので自殺したんですね。

このようにして、日本人は寿命が延びているのに、とても不幸な状態で死ぬ人が多くなっています。「下流老人」という本の著者藤田孝典さんは、このような生活に苦勞している老人を「下流老人」と呼んでいます。日本の高齢者3000万人のうちの2割以上が下流老人になっているそうです。600万人から700万人なんだそうです。

この人たちの特徴について著者は、3つの「ない」ということで説明しています。

①収入が著しく少「ない」。②十分な貯蓄が「ない」。③頼れる人間がい「ない」（社会的孤立）。

金持ちの国と思われた日本が、今こんな困った状態にあるのです。これは、日本の国が、いちじくの木のように、神様から切り倒されるような危機的状況にある、ということでしょう。これを切り倒さないようにイエス様が働きかける、というのが福音書のお話ですが、それではキリストの体である教会は、この問題に対して、何ができるのでしょうか。簡単にお金を作ることは、弱い教会にはできません。しかし、3番目の頼れる人間関係を作ることは、できるのではないかと、思ひます。

私はこの10年くらいのフィリピンの皆さんとの関わりで一番学んだことは、聖歌の『パナナグータン』という歌の最初の言葉の中に現れていると思ひます。

『誰も一人だけでは生きては行けない。誰も一人だけでは死んでも行けない。』という言葉から始

まるのですが、日本では、ひとりで死んでゆく人たちが多くなったのです。私が年賀状を出した人々の中で、昨年1年間で二人のひとが、誰にも看取られずに亡くなりました。フィリピンでは考えられないことかもしれません。親が子どもを育てることさえ放棄したり、子どもを殺してしまう話が日常的です。



(村の人と紙の凧揚げを楽しむ小林司祭・右)

しかし、私は昨年リサール州タナイのジャンボリーの村の子ども達と出会って、感心しました。10歳にもならない女の子が、幼い自分の弟を背負いながら生活しているのです。ここパラレでも同じでしょう。フィリピンの子どもたちは、小学生の時からもう子どもの育て方を生活の中で学んでいるのです。そしてそんな子どもたちを周りの家族や近所の人々も見守り支え合っていることを実感しました。

キリスト教の信仰の本質は、「イエス様が私たちを愛してくださったように、わたしたちもお互いに愛し合うこと」です。(ヨハネ15:12など) 私たちの間でこの愛し合う結び付きができる時、私たちのいちじくの木もぶどうの木も、豊かに実を結び、決して切り倒されることはないと思うのです。

そして、贅沢な生活に慣れた日本人が、今後収入を減らし、貯蓄がなくなっても、生きて行く方法を学んでゆけるように、と望んでいます。このワークキャンプを通して、日本の若者がお互いの

ことに責任を持つ、「パナナグータン」の精神をフィリピンの皆さんから学び、人間関係が希薄になっている日本の社会にあって、私たちがキリストの業に励み、お互いを助け合う共同体に成長するように、祈り助けていただきたいと思います。今後もこのような交わりが続き、発展してゆきますように祈ります。ありがとうございました。